

---

# 中国初期国家の形成過程

---

The Formation Process of the Early State in China

岡村秀典

OKAMURA, Hidenori

[Abstract] Comparing the composition of animal bones excavated from the Neolithic sites in the Huanghe and the Changjiang river basins, pig production spread out widely as a sideline of the farming. It was because a pig grows quickly and the livestock breeding of the self-sufficiency-like small scale is possible in farming villages. However, a complete change to diversity occurred around the 2nd millennium B.C. In farming villages of the mid and lower reaches of the Huanghe river, pig production continued to predominate, but in Shang and Western Zhou dynasty the royal family started in the management of a large-scale stock farm of herbivores such as cattle, sheep and horse, and began to consume them in large quantities for the religious rituals and the courtesies. Value as a prestige wealth was given to horse and cattle newly by the kingship, and a gap in the consumption of the meat between the royal city and the farm village was extended.

According to the inscriptions of oracle bones and bronze vessels of Shang and Western Zhou periods, it is understood that mutual exchanges of offerings were formed between the king and his vassals; as attendance and offerings to the king, and for the purpose of the religious rituals and the courtesies to the royal family, and as rewards and favors from the king. Making up for it from the archaeology, the royal capitals had several palaces and temples for performing those rituals and courtesies, storehouses for collecting the offerings which came from various regions, and handicraft workshops to manufacture items for rituals made from these materials.

The archaeological appearances of the walled towns in the Huanghe and the Changjiang river basins around the 3rd millennium B.C. bear some resemblance to the capitals of Shang and Western Zhou dynasty, but the handicrafts and long distance exchanges which became the economical base of the kingship had not developed fully, and most of the residents were farmers, therefore a gap between the walled towns and the surrounding villages was small. The development to the city became possible due to the formation of the powerful kingship.

## はじめに

かつてわたしは中国の国家形成について、「文化」と「民族」の発展と交流で叙述する文化史考古学の現状を批判しつつ〔岡村 1995〕, 社会と経済の変化に着目した素描をおこなったことがある〔岡村 1998〕。それをふまえて本稿では, おもに殷・西周時代(紀元前2千年紀)の王権と都市とのかかわりに焦点をあてて, この問題を改めて検討してみたいとおもう。

都市の誕生をめぐる, 近年の日本考古学では, たとえば弥生時代の環濠集落が都市といえるのか否か, その都市性が論じられている。具体的な指標として, 遺址の規模, 濠や柵などの防御施設, 首長居館や神殿などの大型建造物, 倉庫, 手工業工房, 街路, およびそれらの配置をとりあげ, そ

の社会と経済について、居住者の人口、その階層差、手工業の專業度、農民と非農民の人口比などが検討され、また集落間の階層性と政治的な関係、分業と交易の経済的な関係についても議論されている。しかし、その社会と経済をめぐっては、社会学などの定義や「普遍的な世界史」モデルに照らして推論されることが多いように見える。断片的な考古資料のほかに手がかりがほとんどない状況の中では、それもやむをえないことかもしれない。

同じように殷周時代の都市についても、かつて普遍的な「世界史の基本法則」を前提に、戦国・秦漢代の文献記録からさかのぼって「都市国家」を復元する試みがあった。しかし、近年では龍山時代（紀元前3千年紀）から殷周時代にいたる時期の城郭遺址の発掘資料が蓄積されているほか、甲骨文や金文（青銅器の銘文）という同時代の文字資料が豊富にあり、その社会と経済について多面的に検討する手がかりが与えられている。かつて松丸道雄は甲骨文の実証的な研究から邑制国家論を提起し〔松丸 1970〕、伊藤道治も甲骨・金文の「邑」を検討するなかから都市の構造にせまろうとしたが〔伊藤 1975:172-224〕、本稿はこうした実証的な方法を継承しながら、考古資料と甲骨・金文との両面から殷・西周時代の都市の性格を明らかにしたいと考える。

## 1. 肉の消費からみた都市と農村

食生活における都市と農村のちがいについて、身近な例からみてみよう。まず現代中国の肉消費量を見ると、1994年の時点で都市では1年間に1人あたり24.4kgを消費するのにたいして農村では12.6kgであり、都市民は農民の約2倍の肉を消費している。この倍率は統計をはじめてから今日まで、ほとんどかわっていない〔小島 1999〕。また、世界史的にみたばあい、いったん凶作にみまわれれば、都市よりも食料を生産している農村のほうが深刻な飢餓におちいることが多く、それはそのまま現代にもあてはまる〔藤田 1993:16-25〕。食生活を見るだけでも、農村の搾取によって成り立つ都市の本質をかいまみることができそうだ。

戦国・秦漢代に編纂された礼書によると、ウマ・ウシ・ヒツジ・ブタ・イヌ・ニワトリの六畜が代表的な家畜であり、さまざまな儀礼に用いる肉は、王や諸侯はウシ・ヒツジ・ブタ（これを大牢という）、大夫はヒツジ・ブタ（これを少牢という）、士はブタだけを用いるとされ、ウシ・ヒツジ・ブタの順の格づけと身分による肉の種類が定まっていた。王朝の定期的な祭祀には、王室で特別に飼養するウシが犠牲に用いられ、重要でない儀礼のばあい、ヒツジは購入したもので代用することも可能とされた。こうした規定がじっさいに殷周時代に実施されていたか否かはともかく、戦国・秦漢代の儒家たちはそれを典範として礼書に記録し、儒教の国教化とともに、礼制として後の王朝に継承されていったのである。

それでは、殷・西周時代における肉食の実情はどうであったのか。それを解明する方法のひとつが動物考古学である。遺址から出土する動物骨のうち、ゴミ坑や地層からばらばらの状態で出土する骨は、人びとが肉を食べたのこり滓と考えられ、その種類と量を分析することによって当時の肉食の実態を復元することができる。前2千年紀について遺址ごとに動物骨の構成比をみると（図1）、比率のもっとも高い動物骨によって、ウシ優位型、ヒツジ優位型、ブタ優位型、シカ優位型の4類型に分けることができる〔岡村 2000a〕。

黄河と長江の流域では、農耕の開始とともにブタの飼養がはじまり、しだいにその比重が増して

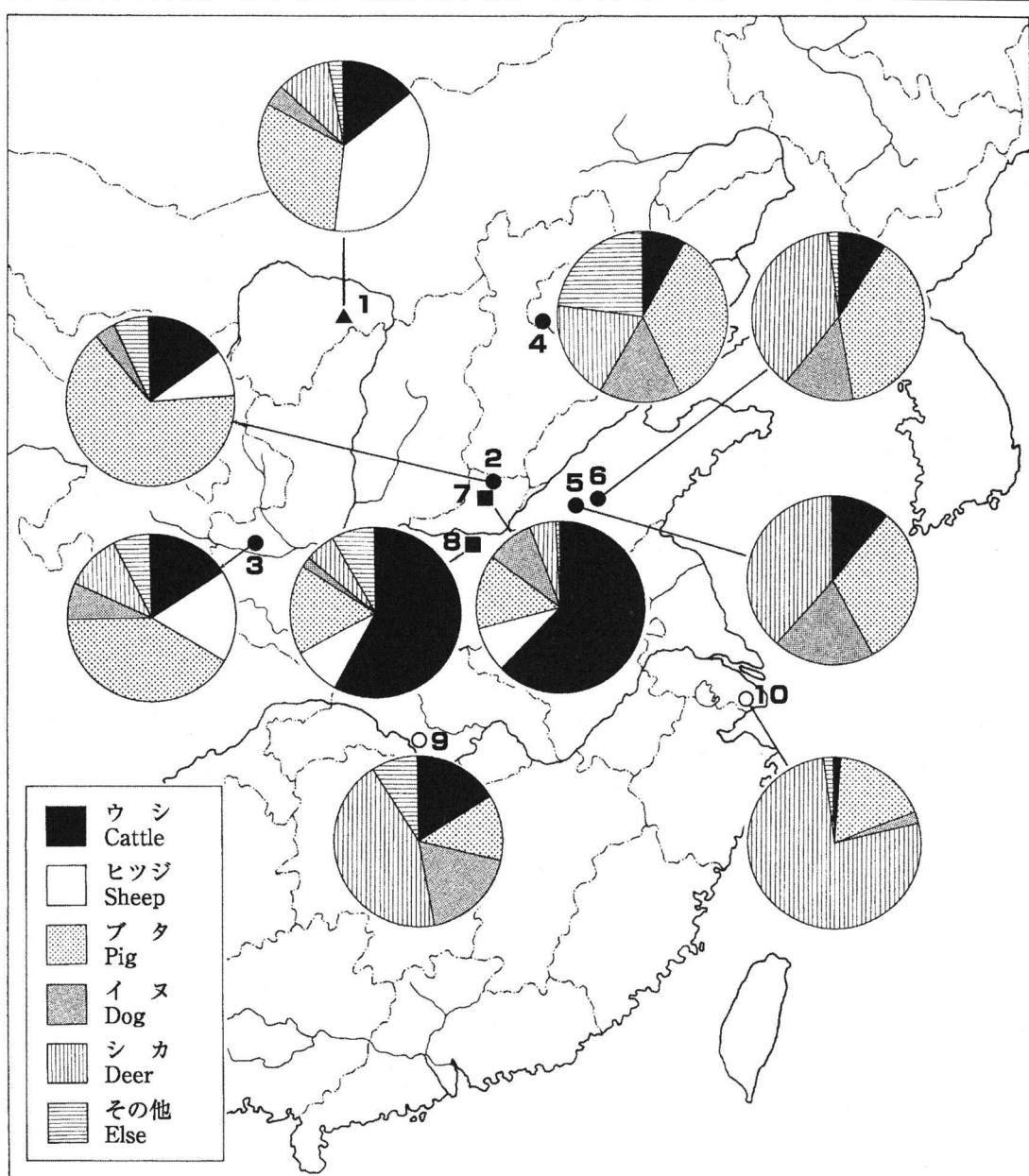


図1 紀元前2千年紀の動物骨構成比

Fig.1 The composition of animal bones at major sites(2000-1000B.C.)

■ ウシ優位型 Cattle dominant type, ▲ ヒツジ優位型 Sheep dominant type,

● ブタ優位型 Pigr dominant type, ○ シカ優位型 Deer dominant type

1 朱開溝 Zhukaigou, 2 涇北花園莊 Huanbei-Huayuanzhuang, 3 禮西 Fengxi,

4 鎮江宮・塔照 Zhenjiangying/Tazhao, 5 西呉寺 Xiwusi, 6 尹家城 Yinjiacheng,

7 苗圃北地 Miaopu-beidi, 8 二里岡 Erligang, 9 周梁玉橋 Zhouliangyuqiao, 10 馬橋 Maqiao

いった。前3千年紀の龍山時代には、一部の遺址でシカ優位型が存在しているものの、ほとんどの遺址がブタ優位型の消費となっている。森林や河川などの自然資源に恵まれているところでは狩猟や漁撈も盛んにおこなわれたが、ブタは繁殖能力とエネルギー効率に優れ、食性がひろくて飼いやすいため、農耕の副業として小規模で自給自足的な畜産がおこなわれた。ブタは中国の農耕社会にもっとも適応した食肉目的の家畜であり、こんにち中国語で「肉」といえば豚肉を意味し、中華料理の中心的な食材となっている理由もそこにある<sup>(1)</sup>。

ところが、前2千年紀になると、黄河上流域の黄土高原地帯では、気候の乾燥・冷涼化と草原環境への遷移にともなってシカをはじめとする野生動物が激減し、ブタ優位型からヒツジ優位型に転換する。オルドス高原に位置する内蒙古自治区朱開溝遺址では、前3千年紀末から前2千年紀前半にかけて、ブタが44%から31%に減少する反面、ヒツジは28%から37%に増加している。草食性のヒツジは乾燥気候にも適応できるため、前4千年紀後半ごろから黄土高原地帯を中心にじょじょにひろがりをみせ、前2千年紀には食肉の首座をブタと交代したのである。この段階ではほとんどの村落で雑穀農耕がおこなわれていたが、前2千年紀末の西周併行期になると、農耕とブタの畜産を完全に放棄して草食性のウシ・ヒツジやウマなどに限定した牧畜経済が成立する。このように黄土高原地帯では、農耕文化の中で牧畜化が進行したのであり、前2千年紀のうちに完全な牧畜へと転換したのであった。

これにたいして温暖湿潤な長江流域の水田稲作地帯では、前3千年紀まではブタ優位型がひろがっていたが、前2千年紀にシカ優位型に転換する。長江下流域の上海市馬橋遺址では前3千年紀の良渚文化と前2千年紀の馬橋文化の動物骨が分析され、ブタは50%から18%に減少する反面、シカは38%から77%に増加している。長江中流域の湖北省周梁玉橋遺址でも、シカは44%、そのほかの野生動物をふくめると53%におよぶのにたいして、イヌは18%、ウシは16%であり、ブタは13%にすぎない。しかも、そのブタにはイノシシがふくまれ、ウシは野生種であった可能性もある。森林や河川の自然資源に恵まれた長江流域では、穀物飼料の必要なブタの畜産を大幅に縮小して集約的な稲作農業をはじめるとともに、漁撈・採集とシカを主とする狩猟を補助的におこなうようになったのである。『史記』貨殖列伝が楚・越の地では「稲を飯にし、魚を羹にする」と記し、『周礼』職方氏が荊州・揚州では稲の栽培と鳥獣の狩猟を生業としていたと伝える生活風景は、前2千年紀にはじまったのである。

いっぽう黄河中・下流域の村落では、前2千年紀にはいっても、依然としてブタ優位型の消費がつづいている。北京市鎮江営・塔照遺址、山東省西呉寺遺址、山東省尹家城遺址では、それぞれブタは31~38%、シカは25~39%、ウシは5~11%、ヒツジは0~1%を占め、農村ではブタの飼養とともにシカの狩猟が重要な生業であった。殷周王朝の成立基盤となった黄河中流域では、前3千年紀よりウシとヒツジがやや増加しているが、農村におけるブタ優位型の消費は基本的にかわらなかつた。王都と考えられる殷代の河南省浚北花園莊遺址と西周代の陝西省豊西（馬王村・大原村）遺址もまたブタ優位型であるが、ブタは花園莊で60%、豊西で41%、ウシは花園莊で17%、豊西で16%、ヒツジは花園莊で10%、豊西で18%を占め、家畜のブタ・ウシ・ヒツジの比重がいちじるしく高いのにたいして、シカは花園莊で2%、豊西で11%と低いのが特徴である<sup>(2)</sup>。殷前期の王都である河南省鄭州城の南順街遺址でもブタが50%を占め、野生動物骨はまったく出

土していない。ブタ優位型の消費の中でも、農村は自然資源への依存度が比較的高く、反対に都市での食肉はおもに畜産に依存していたのである。

しかし、殷・西周時代のもっとも都市的な消費類型といえるのは、ウシ優位型である。殷前期の王都である河南省鄭州城の二里岡遺址と殷後期の王都である河南省殷墟の苗圃北地遺址では、ウシが57～65%に達し、ブタは15～17%、ヒツジはともに9%で、野生のシカは5～6%にすぎない。二里岡遺址は外城郭内の一般居住区で、苗圃北地遺址は青銅器や骨器の製作工房が集中する手工業区だが、殷墟の王宮区と推定される小屯に南接する花園莊南地遺址では、98%以上がウシ骨であったという。ウシの家畜化は前3千年紀にはじまるが、ウシの比率が前3千年紀と比べると10倍以上、同時代の農村と比べても5倍以上の異常な高率を示し、とりわけ王宮に近いほど比率が高くなっているのは、王権によってウシの特化が急速に進められたからにはかならず、礼書にいうようなウシ・ヒツジ・ブタの順の格づけが殷代にはじまったことを示唆している。また、王都では野生動物の骨がきわめて少ないことは、王都の周辺に森林が減少し、食肉はおもに畜産に依存したことをものがたる。それとともに、こうした遺址では動物骨の出土量が膨大で、二里岡では骨の総計が1351片、苗圃北地では約1500片、花園莊南地の灰坑H27では30万点近い骨片が出土し、村落とは比較にならないほど、けたはずれの消費がおこなわれていたのである。

殷代にはまた、祭祀の犠牲として大量の家畜が消費された。甲骨文には、王室の祭祀にいちどに数頭から数十頭、多いばあいには数百から千頭を犠牲にすることが占われている。じっさいの考古資料をみると、宗廟と考えられる殷墟小屯の乙組基址では、建築前に犠牲を生き埋めにした9基の奠基坑からイヌが計15体、建築の途中で犠牲を埋めた16基の置礎坑からウシは計40体、ヒツジは計107体、イヌは計98体を数え、祭壇と考えられる丙組基址では、犠牲を埋めた坑からヒツジが計13体以上とイヌが計24体出土したほか、ウシやヒツジを焼いて犠牲にした遺構が検出されている。殷王の墓地である殷墟西北岡の南でも、整然と並ぶ犠牲坑が発掘され、ウマは30基の坑から計117体が出土した〔岡村 1999〕。このような王室祭祀の犠牲について注意すべきは、ひとつはその莫大な消費であり、もうひとつは大家畜のウマ・ウシと小家畜のヒツジ・イヌが中心で、農村の主要な食肉であったブタとシカはほとんど用いられていないことである。

以上のように、初期王朝が成立する前2千年紀にはブタ優位型の斉一性がくずれ、黄河中・下流域のブタ優位型雑穀農耕、長江中・下流域のシカ優位型稲作農耕、黄土高原地帯のヒツジ優位型牧畜の3類型に生業が大きく分かれることになった。また、中原ではブタ優位型の自給自足的な安定した農耕村落がひろがる中で、殷王朝の誕生にともなって家畜を大量消費するウシ優位型の王都が出現した。王都への家畜の供給は、後述するように、おもに周辺の畜産村落に依存していたのであろう。都市と農村の分化に加え、肉の種類と消費量における都市と農村の格差のはじまり、これは現代まで通じる大きな歴史的変革であった。それでは中国の初期王権はなに故にウシ優位の家畜の等級づけをおこなったのであろうか。また、家畜の生産様式はどのようであり、都市と農村はどのような経済的関係をもっていたのか、それをつぎに考えてみよう。

## 2 王権による畜産と流通

雑食性のブタは農業の副業として自給的な小規模経営がおこなわれたのにたいして、草食性のウ

マ・ウシ・ヒツジは群居性をもつため、その飼養には広大な牧草地での大規模かつ専門的な管理のほうが効率的であり、王室は国家体制を整備する中でその経営にのりだしたのであろう。礼書によると、馬車の繫駕に用いるウマは国都の周辺で「校人」などの官の直接的な管理のもとで飼養するといひ、それは盪駒尊（図2）などの西周金文からも裏づけられている〔林 1959〕。同じように犠牲用のウシやヒツジについても、『周礼』によれば、まず郊外において「牧人」などの官がその飼養をおこない、その後国都にある「牛人」や「羊人」などの官に移送して一定期間の肥育がおこなわれたという。これにかんして『礼記』祭義には、

むかしは天子・諸侯のもとには必ず養獸の官があった。毎年、祭祀の犠牲を選ぶ季節がくると、君主は齋戒沐浴して牧場に臨んだ。祭祀の犠牲は必ず特別の牧場から選別されたのであり、これも敬虔な気持ちのあらわれである。そこで君主は牛を召し入れてこれを点検し、その毛を選び、卜占にかけて吉とてはじめてその牛をみやこの特別な施設で飼養したのである。その飼養期間には、君主は毎月の朔日と十五日に皮弁服を着てその牛を点検したが、これだけ犠牲の飼養に尽力したのも、深い孝心のあらわれである。

とあり、じっさいに殷墟の甲骨文には「貞う、王は往きて牛を省せんか（合集11175）」や「貞う、王は敦（地名）に往きて牛を省せんか（合集11171）」など、殷王がウシの飼養を省察したことが記されていた〔岡村 1999〕。西周金文にみえる「牧」も、礼書などにみえる「牧」と同じようにウマ・ウシ・ヒツジを飼養する牧場であり、王室の官人たちによって管理されていたのであろう。このような犠牲の特別な飼養について、『礼記』は神にたいする敬虔な気持ちのあらわれというが、家畜を聖化することによって犠牲としての付加価値を高めるところに本来の目的があったと考えられる。大家畜のウシはブタと比べて消費財としての経済効率は劣るけれども、それ故に威信財としての価値は高く、また権力によってその価値を高めることが可能であった。すなわち、ウシ優位型は殷の王権によって作りだされた肉食の価値体系であり、王権によってそれが身分制度や経済構造など国家システムに組みこまれていったのである。

中原におけるブタ優位の生態的・社会的環境の中で、ウシを優位とする肉食文化を創出したのは、華北平原に出自する殷人であった。華北平原では龍山時代にウシの飼養が開始されたが、甲骨文の中で高祖の称号をもつ殷の祖先の王亥が牛飼いであったという伝説は、この殷人の文化的風習を背景とするものであろう。こうした牧場は遺構としてのこりにくく、牧畜経営の実態について考古学的な検討はむずかしい。しかし、殷の本貫地と推定される河南省東部では、龍山文化後期（前3千年紀末）の山台寺遺址にウシ9体とシカ1体、平糧台遺址にウシ2体を犠牲にした坑が発見され、ウシの畜産が大規模化しつつあったことがうかがえる。また、二里頭文化（前2千年紀前半）の河南省洛達廟遺址では、3基の坑から祭祀の犠牲と考えられるウシが計5体とヒツジが計5体出土し、草食性のウシとヒツジだけを飼養する専門的な牧場経営が推測できる〔岡村 2001a〕。殷後期に下ると、陝西省壺家堡遺址では屋根をかけた大きな坑H35・36から糞便の堆積と焼死したヒツジが3体出土し、焼け落ちた畜舎の跡と推定されている〔北京大学考古系 1994〕。遺址は黄土台地の辺縁部にあり、『詩経』王風に「夕方になると、羊・牛が山より下りてくる（畜舎に眠る）」という、山間部での放牧の情景を想起させる。このような間接的な証拠から、前2千年紀の中原にはウシやヒツジの専門的な牧畜がはじまったこと、いいかえれば農耕と牧畜とが分化したことがう

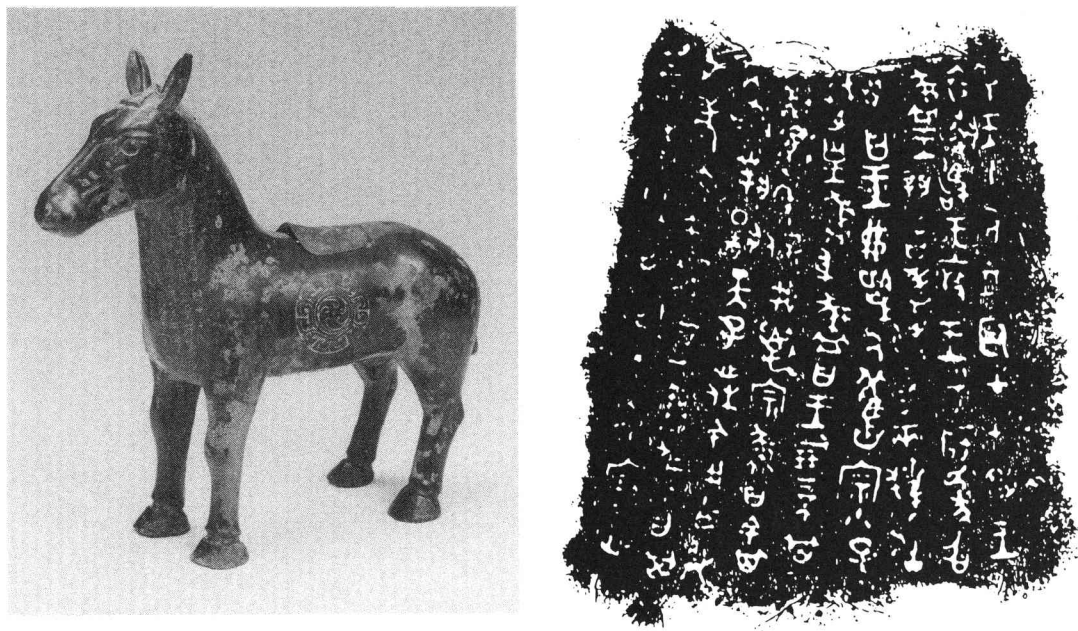


図2 陕西省眉县出土の鬃駒尊（李西興編『陝西青銅器』1994年，図版139）

Fig.2 Foal-shaped zun vessel made by Li (Excavated at Meixian, Shannxi province)

かがわれ、そうした牧畜民が国家によって「牧人」として編成されていったのではなかろうか。

王室が家産制的な国家組織の中で家畜を自給的に飼養することのほかに、従属する族集団からそれが貢納されることもあった。彭邦炯は甲骨文にみえる「貢」「献」「致」「以」「共」「登」「入」「来」「取」「至」などの用例を検討し、それが殷王への貢納を意味すると指摘した。その中には「致三十馬（合集500）」「致牛四百（合集8965）」「致百牛（合集8966）」「致二百犬（合集8979）」「登羊三百（合集8959）」「至百牛（合集9241）」など数を記した例があり、じつに多数のウマ・ウシ・ヒツジ・イヌが王に貢納されていた〔彭 1996：156-167〕。また、陕西省豊西（大原村）遺址から出土した殷末の乙卯尊にはつぎのような銘文があった〔李 1986〕。

乙卯の日に子は大室に朝見し、白□一，玉器九，牢百を献上した。王は子に黄瓚（玉器）一と貝百朋を賞与した。（以下略）

銘文の「牢」とは特別な施設で肥育したウシを指し、100頭ものウシが王への朝見のさいに献上されている。殷代にはこのような家畜が数十から数百頭の単位で貢納されていることから、王室以外の族集団でも大規模な畜産がおこなわれていたことがうかがえる。王室の祭祀と儀礼のために、王室の経営する牧場のほか、各地の族集団が経営する牧場からも多数の家畜が王都にもたらされたのである。また、『礼記』礼器は大饗のまつり（太祖廟での先王の合祀）のとき各地から「牛・羊・豕，魚，乾し肉」が献上されたといい、『続漢書』礼儀志中には正月の朝賀にさいし「中二千石・二千石は子羊，千石・六百石は雁，四百石以下は雉」を貢納すると記され、こうした儀礼用動物の貢納は漢代まで継続したことがわかる。

西周時代になると、北方の牧畜民との戦いで捕獲した戦利品が貢納されている。陕西省から出土

したと伝える西周前期の小孟鼎は、俘虜13081人、車30輛、牛355頭、羊38頭を捕獲したことを記し、陝西省下務子村から出土した西周後期の師同鼎は、車馬5乘、大車20輛、羊100頭の戦利品があったことを記している。先述の殷王に貢納されたウマ・ウシ・ヒツジには、このような戦利品が少なからずふくまれていたのかもしれない<sup>(3)</sup>。

王都に集められた家畜の一部は、王室の儀礼に消費したほか、王から臣下へと反対に再配分されることがあった。洛陽から出土した西周前期の令方彝〔白川 1964：276-309〕には、洛陽のみやこでの儀礼に奉仕した亢師と令にたいして、上司の明公が恩賞として「鬯（酒）・金（銅）・牛を賜い、それを用いて祖先をまつれ、と告げた」ことが記されている。また、これと同時に出土した臣辰卣〔白川 1964：339-349〕には、洛陽のみやこでの儀礼にさいし王が「百姓（族人たち）に豚を賜与し、族長の土上らに卣（酒壺）・鬯・貝を賞賜された」とあり、族人たちには格の低いブタが与えられたことがわかる。ほかに西周前期の叔徳簋〔白川 1966：561-565〕には「王が叔徳に臣妾十人・貝十朋・羊百を賜わった」とあり、叔徳1人に100頭のヒツジが下賜されている。これらのウシ・ヒツジ・ブタはいずれも王都での奉仕にたいする恩賞として与えられたものであり、とくに令方彝に明公が「それを用いて祖先をまつれ」と命じているように、王など上位者の恩寵を祖先に報告することを暗黙の条件として下賜されたのであった。すなわち、王都においては王室の祭祀と儀礼を目的として家畜が貢納され、賞与というかたちで王から臣下にそれが再分配されたのであり、その贈与交換に君臣関係が表象されたのである。殷・西周時代の王都は、そうした王権の政治的秩序を維持する流通の中核であった。

### 3 金文からみた西周時代の王都

西周の本拠地は、いまの陝西省西安市から宝鶏市の一带にあった。岐山県と扶風県にまたがる周原が最初のみやこ周で、ついで西伯（文王）と武王がいまの長安県に宗周を建設する。殷を滅ぼしたのち、幼い成王を補佐した周公は、東方の殷の遺民を鎮撫する拠点として洛陽に成周を造営する。その経緯は『尚書』召誥・洛誥・酒誥などにみえるが、さきにあげた西周前期の令方彝（図3）の銘文〔白川 1964：276-309〕からその機能を考えてみよう。その全訳はつぎの通りである。

- ①八月甲申の日に、王は周公の子、明保（明公）を三事（王室行政）と四方（諸侯）を管轄するべく、卿事寮の総攬を命じた。
- ②丁亥の日（4日後）に、明公は矢令に命じてそれを周公の宮廟に告祭させた。
- ③さらに明公は矢令を成周のみやこに派遣し、卿事寮を会同させ就任式の準備をさせた。
- ④十月上旬の癸未の日の朝、明公は成周に赴いて王命を伝達し、三事の命令を卿事寮と諸尹（長官）と里君（村長）と百工（手工業者）に告げ、四方への命令を諸侯の侯・甸・男に告げた。王命の伝達はすべて終了した。
- ⑤甲申の日（翌日）、明公は犠牲を京宮に用いた。乙酉の日（その翌日）、犠牲を康宮に用いた。すべて完了した。犠牲を王宮に用いた。明公は成周の王宮より帰った。
- ⑥明公は亢師に鬯（酒）・金（銅）・牛を賜い、「それを用いて祖先をまつれ」と告げた。また令にも鬯・金・牛を賜い、「それを用いて祖先をまつれ」と告げた。そして、さらに「今、我れは汝ら亢師と矢令の二人に命令する。精いっぱい、汝の同僚たちと汝の職友たちとを助けよ」と命じた。
- ⑦作冊令は明公尹の恩寵にこたえるべく、父の丁をまつる青銅彝器をつくり、明公の寵榮を父丁におよぼし、父丁の遺徳を顕彰しようとする



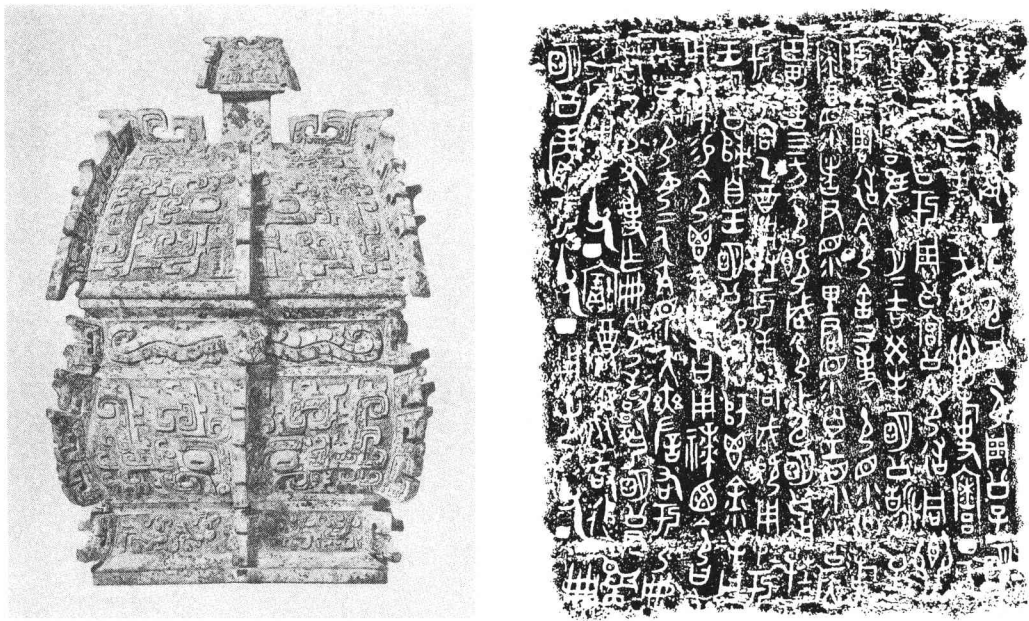


図3 洛陽出土の令方彝（容庚・張維持『殷周青銅器通論』1984年，図版85）  
Fig.3 Fang Yi vessel made by Ling (Excavated at Luoyang)

ものである。

成周の政治的機能について、④は三事（王室行政）と四方（諸侯）を管轄する卿事寮のほか、諸尹と里君と百工などの役人と手工業者があり、四方の諸侯に王命を伝達する場として機能したことを記している。礼書によると、諸侯は定期的に王のもとに朝覲することが定められていたが、成周にはそうした朝覲の場としての王宮がじっさいに存在したのであろう。⑤は成周に「王宮」のほか「京宮」「康宮」という宮殿があり、犠牲を用いた臨時の祭祀がおこなわれたことを記している。「王宮」「京宮」「康宮」それぞれの具体的な構造については、周原の鳳雛甲組建築址のような中庭をもつ四合院式の構造や礼書にみる宗廟が参考になるだろう。また、そうした宮殿が王都の数か所に分散していた様子は、後述する周原遺址群にうかがうことができる。

成周の経済的機能について⑥をみると、亢師と矢令に賜与された「鬯」と「牛」は祭祀用の酒と肉であり、「金」は祭祀用の青銅器の原料であった。殷の王都である鄭州城や殷墟、西周のみやこ周・宗周・成周にそれぞれ大規模な青銅器の鑄造工房があったことは、鑄型や工房址などの出土によって判明しており、王室の工房ではこのような賜与された銅原料をもとに貴族たちの青銅礼器も鑄造されたのであろう。⑦には矢令がじっさいに賜与された銅で父をまつる青銅器をつくり、明公の恩寵を報告したことが記されている。また、下賜された「鬯」は貢納された穀物と香料を用いて王都でつくられた酒であり、「牛」は王都の特別な施設で肥育されたウシであったと考えられる。つまり、穀物・家畜・銅原料などさまざまな貢納物が各地から王都に集積されたのち、そこで家畜の肥育・聖化と青銅器や酒など各種の祭儀用品が王室の工房で加工・製作され、王都における祭祀と儀礼の場で使用・消費されたのであり、王都はそうした祭儀用品の生産と消費の中核であった。

④にみえる「百工」は王権によって掌握された手工業者たちであり、王都では日常の生活用品も生産されていたであろうが、王権の政治的機能を再生産するところにその主たる役割があったというべきであろう。<sup>(4)</sup>このような王権に奉仕する特殊な手工業が王都に集中していること、それが一般村落との大きなちがいである。

成周の経済的機能にかんして、西周後期の兮甲盤〔白川 1971：785-799〕には、

五年三月、王ははじめて自ら玁狁を討伐した。兮甲は王に従って折首執訊の軍功があった。そこで王は兮甲に馬四匹と駒車を下賜し、つぎのように命じた。成周のみやこで四方から集められる貢納物を管理するとともに、南淮夷に赴いてその徴収にあたるように。もともと淮夷はわれわれに貢納の義務を負う人たちであった。必ずその布帛？・その農産物？・その進人（奴隸？）・その貯（特産品？）を献上させるように、と。（以下略）

とあり、淮河流域の夷族はかねてより周王にたいして人間をふくむさまざまな貢納の義務を負い、この青銅器をつくった兮甲は、諸侯や蛮夷から成周に集められた貢納物の管理を周王から命じられたことがわかる。成周にはそうした貢納物を保管する王室の倉庫群があり、西周後期の頌壺〔白川 1969：153-173〕には、

（前略）王はつぎのように命令した。頌よ、汝に成周の貯（倉庫）廿家の管轄を命じる。また、新しく造営した貯を監督し、そのたくわえをもとに王宮を維持せよ、と。（以下略）

と、この青銅器をつくった頌が周王から「廿家」をもって数える倉庫の管理と王宮の経営を命じられたことによっても知ることができる。西周代の倉庫群は発見されていないが、殷前期の王都である河南省偃師城では、城郭の西南隅に200m四方の壁で囲ったⅡ号建築群があり、上・中・下層とも約25×7mの基壇が規則正しく密に配列され、建物が特異な柱配置をもつことから、調査者はこれを府庫と推測している〔王 2000〕。

殷・西周時代の王都には、王権によって人も移住させられた。周原の莊白1号坑から出土した西周後期の史牆盤には284字からなる長い銘文があり、微史族の祖先の輝かしい功績が記されている〔白川 1979：335-369〕。その中に、

（前略）静幽なる高祖（微史族の始祖）はもともと微（地名）の本拠にいた。武王が殷を討伐したとき、微史の烈祖は武王のもとに來朝し拜謁した。武王はそこで周公に命じて微史の家を周の地に定めて住ませた。（以下略）

とあり、もともと殷に属していた微史族は、殷の滅亡とともに周に従属し、王命によって微から周のみやこに移住したことがわかる。史牆盤と共伴した鐘の銘文から、その新しい土地は「五十頌」という広大な農地をふくむ采邑であったと考えられている〔伊藤 1987：321-323〕。紀元前2千年紀になると、集団的な移動の活発化とともに、多くの族集団が集住する王都が出現し、新しい人的結合にもとづく国家秩序が必要となったことが推測され〔岡村 1998〕、史牆盤は族集団の移封や遷徙に王権が深く関与していたことをものがたっている。

王都の軍事的な機能については、宗周に「六師」、成周に殷人を中心とする「八師」という軍団組織があったほか、金文には「某師」という地名や「師某」という人（官）名が多く、かつて貝塚茂樹が「戦士国家」と呼んだような体制が、王都から辺境におよぶ領域内に編成されていたと考えられる〔小南 2000：108-112〕。

#### 4 考古学からみた都市の形成

長江中流域では、前6千年紀の彭頭山文化に環濠と低い土塁をめぐらせた集落があらわれ、水田稲作の進展とともに前4千年紀の大溪文化には直径300mをこえる城壁をもつ城郭集落に成長する。前3千年紀の屈家嶺・石家河文化には、城郭内の面積が79haにおよぶ湖北省石家河遺址を頂点に、25～7haの小型の城郭集落、城郭をもたない小集落が階層的な関係をもち、半径100kmあまりの文化区がひとつの政体として統合された。石家河遺址は、城郭外にも居住区を配置した複合集落であり、城郭内には大量の土偶や紅陶杯を出土する遺構があって、そこでは多数の共同体成員が参集する大規模な祭儀がとりおこなわれたのであろう。城郭の築造に投下された労働力の大きさから、人びとを使役する強権力を想定する意見があるけれども、規模の格差をのぞくと、石家河とそれ以外の集落とのちがいはあまりなく、石家河の居住者も大部分は農民であって、強力な王権をものがたる証拠は発見されていない〔岡村 2000b〕。

黄河流域でも前5千年紀の仰韶文化に環溝集落があらわれ、集団間の戦いが激しくなるにつれて前3千年紀には版築の城壁で囲った城郭集落へと発達し、集落間の階層化がしだいに明確になっていった。中原龍山文化の城郭をもつ河南省後岡遺址では、床面積が20㎡に満たない小型住居が密集し、数世代にわたってほぼ同じ位置になども建てかえられていた。これは集団防衛のため城郭内の限られた空間の中に集住を余儀なくされた共同体成員が、画一性と連帯性を強めた結果であろう。また、山東龍山文化の泰山北麓には、城壁をふくむ面積が20haあまりの山東省城子崖遺址を中心に、面積が6～3haの集落が7か所、面積が2ha以下の小集落が30か所あまり分布している。この重層的な集落群で構成される政体が、およそ半径20kmほどの領域をもって文化区内に並立していた。山東龍山文化では、儀礼用土器の出現、手工業の分業化、墓の格差など、集落内の階層性も顕在化しつつあったが、隔絶した権力の形成にはいたらなかった。

しかし、前3千年紀末以降、中原の文化が拡大するにつれて、ほとんどの城郭集落は廃絶し、黄河下流域、長江中流域、長江下流域に存立していた酋邦（首長制）社会じたいも相ついで瓦解する。二里頭文化（前2千年紀前半）の中心である河南省二里頭遺址は、およそ2km四方の規模があり、その中心部では2基の大型宮殿が発掘されている。1号・2号宮殿ともに土塼と回廊で囲まれた中に長さ40m前後の大型建物とひろい中庭があり、王命の伝達や祖先のまつりなど、王室がおこなう儀式の場として機能していたのだろう。周辺には青銅器や骨器、土器を製作した工房が分布し、王墓こそ発見されていないものの、有力者を埋葬した墓からは、権威や身分を象徴する青銅器や玉器が多数出土している。このような状況から、二里頭遺址は宮殿を中心に王都の機能を備えつつあったことがわかる。ところが、二里頭文化末期にそれが急速に衰退し、かわってここから6km東に南北1100m×東西740mの城郭をもつ偃師城が建設される。それは明らかに二里頭の集団にたいする軍事的な威嚇をものがたるものであり、つづく殷前期（二里岡文化）にその城郭は2倍あまり（1710×1240m）に拡張され、河南省鄭州城（内城郭は1870×1700m）とともに王都としての機能をいっそう完備するようになった。偃師城の中央に位置する宮城区では中庭をもつ大型の宮殿がこれまでに8基確認され、城郭の西南隅には200m四方の土塼で囲まれた倉庫群があった。鄭州城は内城郭の東北部に宮殿区があり、外城郭内には青銅器や骨器、土器を製作した手工業工房が分布している。外城郭内の二里岡遺址ではウシを主とする動物骨が大量に出土し、さきに指摘したように、

都市的な肉消費が想定できる。

二里头文化の領域は、二里头遺址を中心とする半径100kmほどの範囲に限られていた。それは龍山時代の石家河文化や良渚文化の領域と比べて大きな差はなく、周辺に位置する山西南部・河北南部・山東・河南東部・湖北は、それぞれ別の文化領域に属していた。しかし、土器や玉器にみる地域間の交流は、龍山時代とは比べものにならない規模に拡大した。二里岡文化になると、殷は二里头文化の領域をこえて勢力を伸ばし、辺境には王権に直属する城郭を築いていった。王都の鄭州と偃師は200haをこえる城郭をもつのにたいして、河南省府城・山西省東下馮・山西省垣曲・湖北省盤龍城などの地方の城郭は10ha前後の規模しかない。この落差の大きさは垂直的な統合性の高い政体を示唆するが、地方の城郭でも内部には大型の宮殿があって、軍事的な役割のほかに地域を統治する政治的な拠点として機能し、湖北省盤龍城のばあいは、銅原料の獲得などの経済的な目的があったと推測される。

殷後期の王都である殷墟は、およそ5km四方の範囲に、王や貴族たちの墓地・宮殿・住居のほか、青銅器・玉石器・土器・骨器を製作する工房が分布している。殷後期に突如として建設がはじまり、殷王室の滅亡とともに廃絶した、政治と経済の中核的機能をもつ王都である。殷墟の各所に散在している墓地の中で、1000基近い墓が発掘された西区墓地をみると、墓の分布から細分される群ごとに土器の組成や頭位の方向が異なり、青銅器の族記号もそれに対応することから、さまざまな族集団によって墓地が形成されたことがわかる。その族集団は、さきに見た史牆盤の微史族のように、王室に奉仕する目的で王都に住むようになったのであろう<sup>(5)</sup>。殷墟は、城郭こそ未発見であるが、従属する多数の族集団が王宮を中心に群居する大都会であった。

殷墟を中心に殷の文化領域はおよそ半径600kmの範囲にひろがり、その周辺、たとえば四川の三星堆文化は、中原の文化を積極的に吸収し、大型の神面や人頭像など特異な青銅器を創造した。長江中流域の湖南・江西では、大型の青銅容器や楽器、灰釉陶器などが生みだされた。鉛同位体比の分析によると、鄭州・殷墟・三星堆・江西の青銅器はすべて特殊な同一の原料を用い、1か所で採掘された原料が文化領域をこえて広域に流通していたという。また、湖南・江西の灰釉陶器や南海産の寶貝は、王都を中心とする中原に運ばれた。また、殷墟の甲骨文には、上述の家畜のほか、穀物、卜用の亀甲、象牙、玉、貝、塩などの貢納記事があった〔彭 1996：156-167〕。殷墟は、西周時代の王都と同じように、王権の政治的秩序を維持する流通の中核であり、交易の拡大とともにそれを掌握する王権はますます肥大化していったのである。

西周の王都については、前章に金文からみた洛陽の成周をとりあげたが、考古資料が充実しているのは陝西省の扶風県と岐山県にまたがる周原遺址群である（図4）。ここでは3km四方の範囲に大型建物、墓、青銅器の埋蔵坑などが密に分布し、宗廟と推測される鳳雛甲組建築址を中心とする大きな城郭が近年の航空探査によって確認されている〔龐 2001〕。鳳雛甲組建築址は、前堂と後室を東西の廂室が囲む「日」字形の四合院式配置で（図5）、西室内の坑から出土した大量の甲骨は、殷王をまつる内容の文字を刻み、殷末期における殷と周との関係を知る資料として注目されている。ここから2km東南の召陳村や東1kmの雲塘村でも瓦葺きの大型建築址が発掘され、齊家村では文字を刻んだ甲骨が出土していることから、金文に「某宮」と呼ぶような王宮や宗廟が一带に散在していたことがうかがえる。また、莊白村で発見された史牆盤をふくむ103点もの青銅器の埋蔵坑

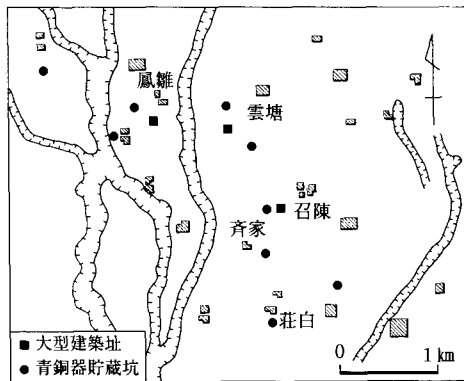


図4 周原遺址群  
Fig.4 Map of Chouyuan and major sites  
(Western Chou period)

- House compound
- Hoard of bronze vessels

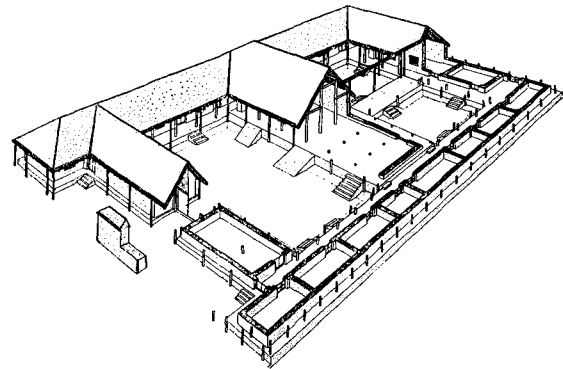


図5 鳳雛甲組建物の想定復元  
(楊鴻勛『文物』1981-3による)  
Fig.5 Reconstruction of Fengzhu house compound  
(Western Chou period)

は、周に帰順した微史族に属するものだが、こうした族集団に関する青銅器の埋蔵坑や中小の貴族墓が周原一帯に散在していることから、殷墟と同じように、周原でも王宮の周囲に多くの族集団が雑然と居住していた状況が復元できる。

西周王朝の成立期、東方支配のために洛陽に王都を造営したほか、王族や功臣を各地に封建して支配にあたらせた。北京市郊外の琉璃河遺址は、王族の召公を封建した燕国の都城であり、城郭は東西829m×南北500m以上の長方形平面をもち、西周初期の築造が発掘によって検証されている。城外の墓地から出土する土器は基本的に西周式であるが、城内からは西周式のほかに殷系統の土器と在地的な土器とが混在して出土し、しだいに西周式に統合されていった〔劉・趙 1997〕。殷系統の土器は燕の封建にともなって移住させられた殷人の用いたものであり、辺境においても王権によって周人・殷人・土着民の共生する新しい人的結合が生まれていたのである。したがって、このような地方の城郭都市は、殷前期のそれと同じように、自律的な都市国家というより中央の王権が地方支配のために設置した植民都市に近いものであった。

## おわりに

以上、おもに考古資料と甲骨・金文によりながら、礼書などの古文献を補助的に用いることによって、殷・西周時代の王権と都市の社会・経済システムについて分析を試みた。殷・西周時代の王都は、強力な王権の成立によって、その政治的身体を再生産していく王宮・手工業工房・倉庫などのハード面と祭祀・儀礼をめぐる貢納・消費・再分配のソフト面が整備され、政治・経済・軍事的機能を集中させた都市と評価できる。これにたいして先行する新石器時代の城郭集落は、たとえば石家河遺址の外形的な構造などには殷・西周時代の王都と類似するところがあり、考古学ではそれが過大に評価されてきたけれども、経済の内実は王権の政治的身体を再生産するための手工業が未発達で、地域間の交易があまり活発ではないし、社会的には居住者の多くは農耕民であって、遺址

の規模をのぞけば、周囲の村落との格差は小さく、都市性の未熟さが指摘できる。殷・西周時代の王都についても、それは王室の家産制的な都市であって、王権と祭祀のシステムに経済が埋めこまれている点からみれば、開放的な市場をもつ都市の一般概念にはあてはまらない。しかし、ここで重要なことは、殷・西周時代の王都が普遍的な都市の定義にあてはまるか否かということではなく、それが新石器時代からの流れの中で、王権の形成とともに上述のような構造と機能をもつにいたったという、その歴史的事実の認識であり、その歴史的评价なのである。とくに考古学ではアプローチのむずかしい王権と都市の課題について、本稿では文字資料を併用することによって実証的かつ多面的な分析を試み、これまでにない都市像を描きだすことに成功したのではないかとおもう。もちろん、甲骨・金文は、同時代資料とはいえ、王権の立場から書かれたものであるから、そのバイアスは考古資料で補正していかなければならないのであって、本稿の第1章において動物考古学の新しい研究成果をもとに都市の意外な一面をえぐりだしたような、考古学じたいの新しい試みを積み重ねていくことが今後の課題であろう。

#### 註

(1)——ちなみに日本の関西で「肉」といえば牛肉を指すが、関東では豚肉を指す。これは肉の消費量と相関する。

(2)——報告では先周(殷墟期)文化、西周前期、中期、後期の4時期それぞれのデータが示されているが〔袁・徐 2000〕、ここでは西周前期から後期までの3時期のデータをまとめている。

(3)——銅原料は王権の秩序維持において家畜と並ぶ貴重な資源であった。南淮夷などの征討によって獲得したそれは、家畜と同じようにいったん王室に納められ、賞賜というかたちで王から臣下へと再配分された〔松井 1999〕。

(4)——「百工」は、西周後期の伊簋〔白川 1971: 520-524〕に「王は周の康宮に在り。(中略)王は令尹の封を呼んで伊に冊命し、併せて康宮の王臣妾・百

工を官司させた」とあるように、王宮にも付属していた。また、西周後期になると、師罍父(師罍簋)や虢仲(公臣簋)などの有力諸侯が私的に「百工」を抱えるようになった。王都を中心とした手工業生産が、王室の弱体化と諸侯の台頭によって分権化しつつあったことがうかがえる。また『周礼』考工記の「百工」について、鄭玄注は「百工は司空に事える官属」といい、『尚書』禹貢兗州条の鄭注では「貢は百工の府が受理して貯える」という。王都に集められた貢納物は「百工」が管理していたことがわかる〔渡辺 1996: 222-226〕。

(5)——殷墟西北岡の王墓は、副葬された青銅器・玉器の銘文や祭祀坑のあり方などからみて、殷王に從属する多数の族集団による盛大な共同儀礼の舞台であったと考えられる〔岡村 2001b〕。

#### 引用・参考文献

- 伊藤道治 1975『中国古代王朝の形成』, 創文社。  
伊藤道治 1987『中国古代国家の支配構造』, 中央公論社。  
袁靖・徐良高 2000「豊西出土動物骨格研究報告」『考古学報』第2期。  
王 学荣 2000「河南偃師商城第Ⅱ号建築群遺址研究」『華夏考古』第1期。  
岡村秀典 1995「区系類型論とマルクス主義考古学」『展望考古学』考古学研究会40周年記念論集。  
岡村秀典 1998「農耕社会と文明の形成」『岩波講座世界歴史』第3巻, 岩波書店。  
岡村秀典 1999「中国古代王権と祭祀」『考古学研究』第46巻第2号。  
岡村秀典 2000a「殷代における畜産の変革」『東方学報』京都第72冊。  
岡村秀典 2000b「屈家嶺・石家河文化属城市文明嗎」『殷文明・安田喜憲編「稲作、陶器和都市的起源」, 文物出版社。  
岡村秀典 2001a「中国古代の動物犠牲」小南一郎編『中国の礼制と礼学』, 朋友書店。  
岡村秀典 2001b「王墓の成立とその祭祀」『古代王権の誕生』第1集, 角川書店。  
小島麗逸 1999「中国草物語」『日中文化研究』14。  
小南一郎 2000「京師考」岡村秀典編『中国古代都市の形成』科研費研究成果報告書。

- 
- 白川 静 1964『金文通釈』巻1上, 白鶴美術館。  
白川 静 1966『金文通釈』巻1下, 白鶴美術館。  
白川 静 1969『金文通釈』巻3上, 白鶴美術館。  
白川 静 1971『金文通釈』巻3下, 白鶴美術館。  
白川 静 1979『金文通釈』巻6, 白鶴美術館。  
林巳奈夫 1959「中国先秦時代の馬(1)」『民族学研究』第23巻第4号。  
藤田弘夫 1993『都市の論理』, 中公新書。  
北京大学考古系商周組 1994「陝西扶風県壹家堡遺址1986年度発掘報告」『考古学研究』(二), 北京大学出版社。  
龐 懷靖 2001「岐邑(周城)之発現及鳳雛建築基址年代探討」『文博』第1期。  
彭 邦炯 1996「商王国的土地關係」胡慶鈞編『早期奴隸制社会比較研究』, 中国社会科学出版社。  
松井嘉徳 1999「周の領域とその支配」『中国史学』第9巻。  
松丸道雄 1970「殷周国家の構造」『岩波講座世界歴史』4, 岩波書店。  
李 学勤 1986「禮西発現的乙卯尊及其意義」『文物』第7期。  
劉緒・趙福生 1997「琉璃河遺址西周燕文化的新認識」『文物』第4期。  
渡辺信一郎 1996「天空の玉座」, 柏書房。

〔補記〕2001年3月に原稿を編集部に提出してから、まもなく3年になろうとしている。本稿執筆後の新しい研究成果について、ここで若干の補足をしておきたい。第1章の動物考古学の分析に関しては“The Expansion of Pastoralism and the Formation of Early States in China”(*Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, vol. 75, 2004)に最新のデータを掲載した。第2章の畜産の文献学的分析については「先秦時代の供犠」(『東方学報』京都第75冊, 2003年)に詳論した。また、食肉と身分制との関係については「中国古代における墓の動物供犠」(『東方学報』京都第74冊, 2002年)も参照されたい。第4章の都市の形成に関して、山西省襄汾県陶寺遺址で新石器文化最大の城郭が発見され、西周のみやこ周原遺址の発掘も大いに進展しているが、本稿の論旨には影響しない。その新しいデータは「都市形成の日中比較研究」(『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50周年記念論文集, 2004年)にふれており、河南省偃師市二里头遺址の都市性については拙著『夏王朝-王権誕生の考古学』(講談社, 2003年)に詳論した。なお、本稿に引用した「王墓の成立とその祭祀」(『古代王権の誕生』第1集, 角川書店)は、実際の出版が2003年にずれこんだが、本稿では〔岡村 2001b〕のままにしてある。(2004年2月23日記)